

お茶うけ 第77話

30年の変わらぬ友情 河川技師デ・レイケ その2

明治政府の招聘に応じて来日したオランダ人河川技術者のうち、第一陣のファン・ドールン (Van Dooren)と第二陣のジョージ・アーノルド・エッシャー(Geroge Arnold Escher)は オランダ王立アカデミーの土木工学科の同級生で、J. レブレット教授から水理学を学び、1863年に卒業しました。ドールンはオランダ領ジャワでの海外勤務を経験していたこともあり先に来日しました。日本で河川技術者の増強が必要になったとき、彼は明治政府に旧知のエッシャーを推薦しました。エッシャーは名門貴族の出で、オランダ内務省土木局の幹部候補生でしたが、日本に強い関心を持っていたのです。

ドールンが第二陣の技術者の一人にてヨハニス・デ・レイケ(Johanis De Rijke)を推薦したのは、彼が以前オランダの北海運河工事に土木局の技官として働いたとき、工事の現場主任監督であったデ・レイケの仕事ぶりと力量を高く評価していたからです。

デ・レイケは、1842年オランダで築堤職人の子として生まれ、少年時代から家業の堤防の構築・修理を手伝っていたようです。ある堤防の建設現場で少年デ・レイケは、オランダ土木局技官のJ. レブレット(のちの王立アカデミーの水理学教授)に出会いました。レブレットはデ・レイケの土木工学の質問に答えるうちに、デ・レイケがとてものみこみが早いのに感心して、デ・レイケに技術の基礎となる数学や力学から、自分の得意分野の水理学の高度な技術までを親切に教えました。

デ・レイケは、1867年に北海運河の主要な構造物の一つである オラン工閘門(こうもん)の現場主任監督として働き、閘門を見事に完成させて、ドールンたち土木局の技官から高く評価されました。

来日したデ・レイケは、同じ年のエッシャーと一緒に淀川の治水工事を行います。オランダを遠く離れ言葉も習慣も違う日本で、治水工事という困難で息の長い仕事をするうちに、エッシャーとデ・レイケは互いの技術力を評価し、深く信頼しあい、生涯変わらない友情で固く結ばれました。

エッシャーは、オランダにいる母親宛の手紙のなかで、次のようにデ・レイケを称賛しています。「彼の工学知識と技術は実地で鍛えた筋金入りです。鋭敏な知性、好感を呼ぶ態度、天賦の観察力、かなり優れた記憶力を備え、考え方も独創的で核心を衝いています。彼の仕事は素早い上に渾身を打ち込むので、当然ながら抜群の成果を収めます。エンジニアの学位を取得している者でも彼ほどの人物はいません。デ・レイケと一緒に働けるこの好機に、彼から沢山のことを学びたいのです」

デ・レイケも、身分や学歴にこだわらない気さくなエッシャーの人柄にひかれ、尊敬できる友人として心から信頼して、なにかにつけて相談するようになりました。

デ・レイケは、ドールンやエッシャーが帰国した後もただ一人残って、1903年(明治36年)にオランダに帰るまで、30年もの間、日本の河川の治水に真摯に取り組み、多くの河川の改修計画を立案し工事の施工を指導して、次第に重要な任務を任されるようになりました。新しい仕事を担当するたびに、デ・レイケはエッシャーに手紙を書きました。デ・レイケは、河川、砂防、港湾などについての明治政府への提言や、河川の現場で調査、設計、審査、指導したことを内容をエッシャーに知らせて意見を求め、さらにヨーロッパの新しい河川工学の研究報告書や書籍を送ってくれるように依頼しました。その度にエッシャーはこまめに返事を書き、必要な情報を送りました。

デ・レイケからの手紙がしばらくの間途絶えたときは、心配したエッシャーが日本の内務省の知人に手紙を書いてデ・レイケの安否を尋ねています。

30年間にデ・レイケが出したエッシャー宛の手紙のうち、約60通が今もエッシャー家に残っています。「日本の川を甦らせた技師デ・レイケ」は、このデ・レイケの手紙とエッシャーが大学ノート63冊に書き残した回想録を、上林好之氏が丹念に読んで書き上げたものです。

以上

参考文献:

『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』 上林好之著 草思社刊
1999年12月3日初刷

参考資料:

ミドルからの出発(21) 上林好之さん(上) 2000年 2月 2日
ミドルからの出発(22) 上林好之さん(下) 2000年 2月 3日 [いずれも日本経済新聞(夕刊)]

注記:

幾何学を応用した錯覚を利用し、だまし絵的な手法でありえない世界を写實的に描いた 著名なオランダの版画家M.C.エッシャーは、河川技術者G.A.エッシャーの息子です。

